

日本の過去の心を世界にひらく

芳賀 徹

ラフカディオ・ハーンによる日本民話の再話法についての研究であるこの書物が、どうして「（時）」をつなぐ言葉」と題されているのか。一見、難しい題名だ。だが、著者牧野陽子さんの、ハーンの『怪談』その他の作品をつぎつぎに取りあげて、原話とも比較しながら鋭くしなやかに、親密に、読みといてゆくその論述に魅せられてこの書をたどれば、たちまち納得されてくる。「（時）をつなぐ」とは、ハーンが来日以後とくに一貫して抱いていた問題意識であり、著者はそれを強く把握してここにみごとに明らかにしたのだ、と。

民話や伝説はどの民族にとっても祖先たちの豊かな想像力の働きを伝え、過去の明暗を担い、さらに遠く人間というものの前世の記憶にまでつらなっている。ハーンは日本民話の伝えるなまなましい身体感覚をよく再話に生かしながらも、そのなかに宿される土着の過去をこえて、そのかなたに人間普遍の心性を探りあてていったのである。その点を著者

はしっかりと次のようにまとめている。

「このような、滔々たる人類の歴史とともにある物語に向かい合い、それに自らの表現を投影して、その幻影の重なりを言葉にして残すこと。それが、過去の無数の命を引き継ぐ、みずからの存在の確認となり、同時に、未来の命へとつながることであると、ハーンは考えた。」

まさにそのようなものとして、「むじな」の「二度の怪」の物語は、原話から換骨奪胎されて、恐怖と安堵、幻と現実が奥の奥まで繰返される抜きさしならぬ生の空間感覚の表現となった。「耳なし芳一」も再話されて、詩歌の力と藝術家の運命を象徴するオルフェウスの物語の一つの変奏曲にまで昇華された。「雪女」でも「夏の日の夢」の浦島の物語でも、その奥に思いもよらぬ深く広い夢幻の世界がひろがり、その中には西インド諸島の古民話もポードレールも夏目漱石もチェンバレンも画家ゴーギャンさえも往き来する。

ラフカディオ・ハーンは日本民話を英語で再話することによって、これを世界普遍の文学として近代の日本と西欧に与えた。著者牧野さんはこの「（時）」をさらに受け継いで、二十一世紀の未来の命へとつなげたのである。